宝くじ文化公演／(財)茨木市文化振興財団第41回公演

新春狂言
～茨木2003

【出演】茂山千作、茂山千之丞、茂山千五郎、茂山あきら、他茂山狂言会

【番組】『解説』～初めての方にもわかりやすく

『福の神』古典～新春を寿ぐ脇狂言

『死神』新作狂言（作・帆足正規　演出・茂山千之丞）～落語『死神』をもとに書き下ろされた新作狂言の傑作

2003年

1月18日（土）18：30開演／18：00開場

茨木市クリエイトセンター・センターホール

JR茨木駅から東へ徒歩10分、阪急茨木市駅から西へ徒歩10分、茨木市市民会館北100 m

●入場料

1,000円（消費税込み）　全席指定

※宝くじの助成により通常料金の半額以下となっております

※就学前のお子様はご遠慮ください

●チケットの取り扱い（10／21　発売）

(財)茨木市文化振興財団 0726－25－3055／JA茨木市各店舗 0726－27－7762（本所総務課）

ローソンチケット 0570－00－0405（オペレーター予約）・0570－00－0905（Lコード予約・Lコード56491）

チケットぴあ 06－6363－9999（オペレーター予約）・06－6363－9966（Pコード予約・Pコード409－903）

●お申し込み・お問い合わせ

0726－25－3055　(財)茨木市文化振興財団／月～金、8：45～17：15、土・日・祝日休業

〒567-0888　茨木市駅前四丁目6番16号　クリエイトセンター1階

※電話予約もお受けしますが、その場合は1週間以内に財団事務局でご精算いただきます。

※郵送ご希望の場合は、〈チケット料金＋郵送料430円〉を現金書留でご送金いただきます。

主催＝茨木市・茨木市教育委員会・(財) 茨木市文化振興財団・大阪府・(財) 自治総合センター

宝くじは
豊かさ築く
チカラ持ち。

宝くじは、広く社会に
役立てられています。

新春狂言～茨木2003

●2003年1月18日(土) 18:30開演／18:00開場 ●茨木市クリエイトセンター・センターホール ●全席指定 ● 1,000円 (消費税込み)
※宝くじの助成により通常料金の半額以下となっております ●お申し込み・お問い合わせ：(財)茨木市文化振興財団 0726-25-3055

解説／丸石やすし

福の神 ふくのかみ

二人の信心深い男がおり、毎年大晦日には福の神へ参詣することにしています。今日はその大晦日、二人は誘いあわせて社に出かけます。二人が参拝し、年越しの豆をまいていると「福の神」があらわれます。熱心に参詣する二人を幸せにしてやろうと思いあらわれたというのです。福の神は二人に酒を振る舞えと要求し、幸せになる秘訣を語りはじめます…。

お正月に「能」との公演で演じられる「脇狂言」と呼ばれるジャンルの狂言です。「脇能」と同様に、ある人物のところに特に因果関係もなく神があらわれ何事かを演じて立ち去っていくという構成ですが、狂言には福の神のほかにも夷や大黒など庶民の信仰を集めた気軽で親しみやすい神が多く登場します。爆笑を誘うものではありませんが、気品やすがすがしさを感じさせ、みる者の心をなごませてくれます。

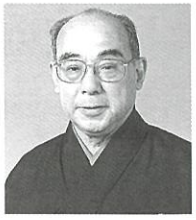
死神 しにがみ／作・帆足正規　演出・茂山千之丞

借財がたまった男の前に気のいい死神があらわれます。この男を気に入った死神は、金儲けのネタをさずけます。『病者の床には必ず死神がいる。枕元にいたならば、どんなに力強い病人でも命は助からぬ。また、足元にいたならば、今にも死にそうな病人でも必ず治ること請け合いじゃ。その死神が見えるようにしてやろう』…と。はじめは死神が足元にいて名医の評判をとりますが、この頃は死神が皆枕元にいて病人を治すこともできず…さて、この男がとった行動は？

落語の「死神」をもとに、能楽笛方・帆足正規により書き下ろされた新作狂言の傑作です。1981年（昭和56年）4月、東京・渋谷のジャンジャンにおいて、当時の花形狂言会により初演されました。以降上演回数40回を超えるヒット作となっています。

茂山千作（しげやま・せんさく）　重要無形文化財個人指定保持者（人間国宝）、日本芸術院会員、日本能楽会常任理事

1919年十一世茂山千五郎の長男として生まれる。1924年5歳の時、狂言「いろは」のシテにて初舞台以来、秘曲「枕物狂」に至る流儀の狂言のほとんどをつとめる。戦後、弟の千之丞とともに他の演劇活動にも積極的に参加。新作狂言の上演、埋もれた旧作の復活にも力を注ぐ。また学校公演を永年にわたり行い、若い世代への狂言普及に努める。海外公演にも多数参加。我が国の文化に対する諸国の理解を深め親善に努める。1966年、十二世千五郎を襲名。以後、芸術祭奨励賞、同大賞、芸術選奨文部大臣賞、紫綬褒章、他受賞多数。1989年、重要無形文化財個人指定（人間国宝）、1991年、日本芸術院会員に認定。1994年千五郎の隠居名である千作を襲名、四世千作となる。天下一とまでいわれるその舞台は呼吸をするように自然だが、芸の神髄を感じさせられる。著者に『千五郎狂言咄』がある。



茂山千之丞（しげやま・せんのじょう）　日本能楽会会員、重要無形文化財総合指定保持者、京都能楽会相談役・狂言協議会幹事

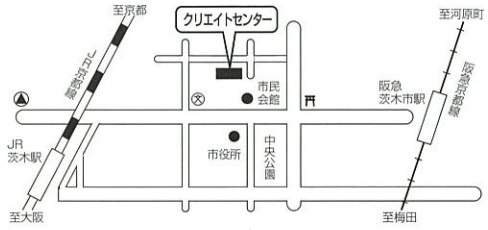
1923年十一世茂山千五郎の次男として生まれる。1924年3歳の時、狂言「以呂波」のシテにて初舞台以来、23歳で「釣狐」を披く。戦後、兄の千作とともに狂言の普及に努める。1948年能楽会の数百年来のタブーを破り、能狂言師として初めてラジオドラマで他のジャンルの俳優と共演。以降、武智鉄二を中心とする新しい演劇運動に積極的に参画。ジャンルを超えた幅広い活動は、保守的な能楽会で物議をかもし狂言会の異端児とも呼ばれたが、その間にも廃絶狂言の復活や古典狂言の新しい演出、新作狂言の演出・出演に努める。1976年から新劇「夕鶴」の山本安英「つう」の相手役「与ひょう」を演じ続け500回を越えた。永年にわたって鍛え上げた芸に加え、生まれ持った声量、美声を武器として、年齢を感じさせないその舞台は観客を魅了してやまない。1996年芸術選奨文部大臣賞、1999年紫綬褒章、他受賞多数。著書に『狂言役者…ひねくれ半代記』がある。

茂山千五郎（しげやま・せんごろう）　日本能楽会会員、重要無形文化財総合指定保持者、国立歌舞伎養成部講師

1945年十二世茂山千五郎（現千作）の長男として生まれる。1950年5歳の時、狂言「以呂波」のシテにて初舞台、20歳で「釣狐」を披く。1976年自分たちの勉強の場であると同時に狂言会の活性化をめざし、新しい世代の観客の掘り起こしをねらった「花形狂言会」を発足。弟・眞吾（現七五三）、従兄弟・あきら、弟千三郎（1980年入会）とともに主宰する。古典狂言のほか、「木竜うるし」（木下順二）、SF狂言「狐と宇宙人」（小松左京）、「死神」（帆足正規）、1000年ぶりの復曲「袈裟求」（織田正吉）をはじめとする数々の新作狂言、復曲に取り組む。東京国立能楽堂での復曲「麻生」では、父・千作（当時千五郎）と共演、舞台上で髪を結う珍しい演技をみせた。ダイナミックでユーモラス、且つ繊細という深みのある芸には定評があり、すでに茂山家の主軸として年間600回にものぼる舞台をふんでいる。1986年京都市芸術新人賞受賞。1994年十三世茂山千五郎を襲名。

茂山あきら（しげやま・あきら）　京都能楽会理事

1952年二世千之丞の長男として生まれる。家業の狂言を祖父・故三世千作（人間国宝・芸術院会員）、父・千之丞に師事。1956年3歳の時、狂言「以呂波」のシテにて初舞台以来、「三番三」、「釣狐」、「花子」を披く。1976年花形狂言会を発足。従兄弟の正義（現千五郎）、眞吾（現七五三）と主宰する。古典狂言のみならず、小松左京作SF狂言「狐と宇宙人」等の新作狂言や1000年ぶりの復曲「袈裟求」などを演じ、狂言の大衆化に力を注いでいる。多彩な演劇人である父・千之丞の影響を受け、テレビ、ラジオ、新劇、実験劇に参加。また、アメリカ人ジョナ・サルツとともに「能法劇団」を主宰。ベケット・イエイツの不条理劇、英語狂言の海外公演を行う。演出家としても関西歌劇団、関西二期会等のオペラ、新劇、能法劇団、新作狂言、パフォーマンス、ファッションショー等を手がけ、「舞台マルチ人間」をめざしている。1992年京都芸術新人賞受賞。著書に『京都の罠』がある。



(財)茨木市文化振興財団
〒567-0888 茨木市駅前四丁目6番16号 クリエイトセンター1階／TEL 0726-25-3055 FAX 0726-25-3036
クリエイトセンター(茨木市市民総合センター) JR茨木駅から東へ徒歩10分、阪急茨木市駅から西へ徒歩10分